



猿風出地  
自字六至二十七

甲子丸旅号  
共九八

共十三

ル 4
375
11





門 呂 4  
號 375  
卷 11

籠前國續風土記卷二十六

東京書局  
學林

古城古戰場目錄

早良郡

紅葉村古戰場

鉢窪古戰場

背振山古戰場

怡土郡

高祖古城

篠原村古戰場

公加布里古城

唐津深江岳古城

九引探題城址

安樂平城址

飯盛古城

曾根原古戰場

飯場村古戰場

宝珠岳古城

吉丹岳古城

小野七兵衛  
藏書

怡土城付筒滝古

小倉村古城

有田村古城

康家古戰場



志摩郡

今津古城

柑子岳古城

可也山古城

姫島古城

潤村古城

馬場山古城

泊村古城

元園村古壘

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

筑前續風土記卷二十六

古城古戰場

紅葉松原古戰場

八幡愚童記

後宇多院文永十一年蒙古圍

口を攻めし時蒙古兵と日本兵とを戦ふ事  
と記す又左衛門少尉系家と小武忠を  
資徳の婿男あり弘安年中蒙古大将と  
討殺すなり  
馬信考より百道松原の正名ありし  
と戦ひし事ハ八幡愚童記より  
武系家と弘安年中と記すハ  
弘安四年蒙古の軍兵あり  
やふと記すなり



大將として鷹崎をして殺し二万人と生捕於河川のまゝ  
て首を刎しりハ情悪き死に記さるゝ云々其後  
其後と稱するなり一鷹崎ハ古名ハ鷹崎ナリ  
又唐津の楽と鷹崎あり昔ハあり元ノ西より百  
道系ハ未子島川のまゝ河原の原ナリ平沙灘と  
松林ありしてふ毛ハ地ありしハ長政公松と植て松系  
とすしとて元和四年四月廿日家臣若木多喜守  
織部小堀久成等ノ命して此事と司としり福長増多  
松原の町人にして毎家一軒より五ノ四五人計りあり  
小松各一本ありて植てせしむるハ松年と云て河  
長一々も六十一年の後唐も松系と成て幾万株と

いふ事と云ふハ今ハ吾本多トハ松系ノ水の河をさり  
小高き土堤をいり一ハ吳城松本ノ防ぎれと云葉一  
河ノ地もハ上古よりハ古戦ノ地と云事と知えし

九列探題城址

浦山の巽とありて壘岩の社と云く南の方と出るお  
少くともより平地あり是則探題の城址と云地延原と  
属せり西保安安れはまハ城ハ古名多く新まると云  
ハ法華經ハ文字と焼付もしく人多く存して今ハま  
無くありハ 伏見院永仁元年三月鎌倉の執権北条  
貞時始りて小糸兼時と能兼と下して探題として  
九列二列ハ政事と司としり西國の薩結して吳城



發来の防備し侍よ是主代の時太宰帥の任しありき  
兼時け城と始りく位と一より後鎌倉小系家よりおつ  
くきて九列探取と下しつらうを城地ハこの所也 後醍  
醐院の時時小系より時より小系英時と探取と一と  
まゝもハ英時滅亡の事太事記及九列記ありてこれハ  
まゝと略ハ英時亡ひ付り合戦と討て一と事と一と  
埋りもや又も後けきと軍よりて戦死の人色もやをき  
ころまてい山れ藤原田の意より時と骸骨と堀出れり  
一と女氏より足利將軍の時源氏新波氏とと探取  
としていぬとちとささる是ハ蒲山の西より山と位と  
よ城址ありてお他所も左城と一とより地蔵の母あり

おのや

鉢窪古戦場

生の松系れ油坂の東れり口くむきはも是と坪の  
窟と云松系の内とありは是と油坂と通りけりは  
へハ海と今ハ古道と云一説と松系れ東の入口と坪の窟  
とよりをひきてい地と堀とハ器器骸骨をととと云  
いハ系田と大友交り合戦とにをれハ是時討死せし  
との骸骨なりと一

飯盛山古城

この山と城址あり太事記と康安元年七月六日征西  
將軍西新田氏族二より余所菊地紀信と武光とと余  
騎増多と出たなり是と討んとて大友少武字像ハ



都合二万の兵を討つて大なる向の上松浦下松浦の  
一帯をこゝ余流はけ飯盛山と打上て敵の後へそどり多  
菊池の家の子城部ありふ余流の勢にて飯盛山を押  
寄らる松浦堂元来大勢を城にありては敵に  
是れをさやうせりてと城中に敵の内通れ者多しと  
報ありて諜して告ぐるしと誠を心得て味方と討つる  
目と敵をこゝに打ちて我々もはるる者ありて  
と争て追うけて首と少敵ありては痛りんと云ひ  
つる松浦堂と城敵前より諜して往く攻めしむ菊  
池家の沖勢と一つをめて明白馬稚の陣と押せられ  
小武大友敵ありて近代に敵は京田の榮瑞隊ありと云

城址と云ふ費橋保りあはれあり

安楽平城蹟

まゝ留村と云ふ村ありけ城の帯すく十町をめぐり  
大なる山ありて山一修平ニ丸ハ西の方のま  
しと云ふ又と云ふ丸と云ふ城を丸に乾と云ふは海浜の  
ありと云ふ所の尾と云荒土の城ありと東の山のり谷と  
あり大谷といふ谷ありと云と城は京と云谷路ハ山を  
城山と其西と云て利山のあり凡小笠原村より仙居より  
ありて其所の東と云と長き山と云て是荒平山といふ  
荒山といふ方も西細よりまゝと二里余行きて林本  
志げまゝ小笠原山内野東入部まゝと云けむ村は荒















後と云ふ山田新太郎中の子は多福なる名一よりしと云ふ  
加勢の者とも首の二つと云ふ事其意を極く云ふ  
池田城よりしてと云ふと宗統よりして攻めすと云  
亦も同じく一と云ふと云ふ事其意を極く云ふ  
同く狼山川よりしてと云ふ事其意を極く云ふ  
紹比老武士の事として書けり其意を極く云ふ  
まゝと云ふと云ふ事其意を極く云ふ  
我の敵前よりしてと云ふ事其意を極く云ふ  
け城よりしてと云ふ事其意を極く云ふ  
内野村と西村の境地と馬立と云ふ事  
よりしてと云ふ事其意を極く云ふ  
より加勢して此城と云ふ事其意を極く云ふ

少くも敵陣よりして出て出た勢として山田新太郎と云ふ  
火の出る程を我の多し山田新太郎と云ふ事其意を極く云ふ  
は旁よりしてと云ふ事其意を極く云ふ  
其士卒も大なる事其意を極く云ふ  
内野村の内小姓と云ふ事  
内野村の内小姓と云ふ事  
首領 吉村と云ふ事其意を極く云ふ  
者ともありしと云ふ事其意を極く云ふ  
よりしてと云ふ事其意を極く云ふ  
うへに合戦も云ふ事其意を極く云ふ  
百も死せしと云ふ事其意を極く云ふ  
より加勢しれと云ふ事其意を極く云ふ



とて多々人殺と殺す事ハ兵亂まじ道雪への名懸に由  
静陣とて門くろくろ概り小田部と既くおろくろ  
城中の女をと助してと大よれ口とめまらるる道雪と  
宗雲より兵糧とこむるとすおろくろ殺しに殺すへくと  
大よの口二下とくろく概り陣と名矢竹山の頂より京田  
を野を陣す狼山にのろくろ殺すこと小賀桂情入道に  
陣入部の口く神代同くろく概り男女細代の奥の如  
くしへき方も多く兵糧もなめまら小田部氏の妻の養  
子よはるる方より女と供とを信言とて城とめはるる  
小田部氏此城より事廿七年にして終つて亡りて城の京  
といふ所のさくこと首領とて大隊もさるる平城の勢と

犯希勢と殺し時首と子埋し墓ありとて

曲淵村古城

け村の左隣り村の南より元龜天正の頃千曲河内守  
氏助其子信助を城せり高祖の京田氏に属す城の上  
九下とくろく概り居定の地と中門表門大門のありと石  
垣程のまじり宅の廻り川端も石垣もい河内守の石  
曲側西村を武四ヶ村田村次高丸野芥七隈並に禁  
系から十一ヶ村と成りといふ河内守は浪人といふ  
長政とけ國と成りといふ後死す  
右十一ヶ村の田畠三ヶ合と  
二万子余石と

背振山古戦場

背振山と板倉村の南より國中とて捕りてつる山と



南朝記曰天授元歲三月撰詔今川子俊大内義弘  
流前卷振少陣守菊池肥前守松浦堂以下攻之  
今川方奥山井伊等系守討死す物とも菊池松浦  
歩負て陣と云云

怡土郡

高祖古城

高祖山の頂上あり其田氏代に居跡あり其高祖と云  
ふは在丸路南と云ふ言ふ上平地東西三千同南北  
十百あり方と云ふ言ふ人斗のあひらとて東西長一  
千在城と二の丸は南にけりまゝなる城跡のまゝにして長一

南北四百あり東西六百あり又二の丸と二の丸を右のひき  
加ふより六百ありのけり上の廣さ南北二千あり東西  
二十四ありあり上平地にて在丸二丸今ハ矢筈竹多く  
海より石垣の跡ははらへり城跡より海と其家の  
地は在丸の陸ありありと姫濱城と云ふあり是京田氏  
て城を築けり時姫濱村人の城せりといふと云は在丸の南  
三四丁と鬼ヶ城とて云ふと山を在城よりいふあり  
城の上谷ありありと云ふと云ふと京田氏常の在宅  
ありあり高祖社ありけり上ありあり村氏ハ所館と云  
今ハ田と云ふあり其ありと城切ありと云ふ南と上高祖と云  
京田氏常の在宅ありと云ふと云ふと今ハ竹林と云ふ



高祖村の南に南北と長く段となり取入の要害あり  
と云ふと田とありぬ大門のまじりぬと大門と云ふ  
高祖村の山ありと云ふ高祖の社ありとありて御  
村中多しと云ふ田家侍の宅ありと云ふ氏宅多しと  
各逐列と云ふなり唐宅多しと云ふ村中唐一と云ふ社  
のまじりぬと云ふ村の入りと云ふとありて門のまじりぬ  
凡い城と云ふと云ふ内唐がしぬと云ふ山のごう嶮と依  
りて築一城と云ふと云ふ要害要害の地ありと云ふ上の京れ  
方よりと云ふ尖城と云ふと云ふなりなり又曰城の山乃  
梯上の京と云ふ本村と云ふのまじりぬと云ふ接駁一と云  
け城のまじりぬと云ふ要害ありと云ふ里氏ハ安徳天皇の宮

居と云ふと云ふと云ふとい城と云ふと云ふと云ふと云ふ  
へくは城と云ふと云ふの事今と云ふと云ふと云ふと云ふ  
高く信一城と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
獻帝のまじりぬと云ふと云ふの建安四年魏文帝と云ふと云ふと  
献帝の四子ありと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
南漢國の霸王と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
多陪王乃付天下唐れ代と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
貞觀年中高祖國の王位を辭し日本國孝徳天皇  
の御宇大化年中十二月晦日播磨國大野谷と云ふと云ふと云ふ  
岸せと云ふ阿多陪王漢と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと



我國と稱せし爲化せしより日本に貴客とて班師の都  
と稱せし大后に位を仰ぐ高貴王と稱せし時先朝  
皇極女帝位とすりて在り則ち高貴王と稱し御  
すは三王子と稱す此等の説は高貴王に非しとすも他家  
傳に記すところありしを以て  
第一王子奴 直王 是坂上連祖才二王子 高貴王 大后  
御后の祖才二王子 基濟王 内親連祖才一 白雉五年  
十月十日 孝徳天皇崩御し御弟 皇極天  
皇重祚とすし御弟 齋明天皇と号し才二王  
子 貴重王 女帝乃冲光子とす 親王の宣旨とあり  
阿多陪王とす 阿多 民族陪王 中子と附せ  
し是よりハ高貴王の在りハ大后に位を仰ぐとす

崔院天武年中高貴純友及道一々色ハ追討使  
として小野好古朝臣と号すも也 阿多は是れ今我  
とすとも也 阿多ハ天武三年五月より高  
貴王より十二代の後胤大藏春高と對馬とす 仰て  
錦の所 蘇軍配乃高貴と稱し 蘇高と稱し 仰て  
天武四年純友とす 仰て 其軍功の賞として 征西  
將軍と仰て 高貴前豊前肥前を改對すと 後  
仰て 名と春高と改め 高貴前 高貴前 高貴前 高貴前  
す此のゆへに 高貴の号も 高貴前 高貴前 高貴前 高貴前  
高貴前の子 高貴前 高貴前 高貴前 高貴前 高貴前  
高貴前の子 高貴前 高貴前 高貴前 高貴前 高貴前



東原を以て所と授資と岩門権正と号し授資の子と太  
宰大監権納と云ふ子と京田次高を授成と云後改  
授成の子京田権法権雅と云授雅の子と京田次高を授  
権直と云ふは授代京田と云殊としてありし岩門の位  
りゆへに授直と岩門少卿権直と云岩門の位を平家  
時と授直大宰少卿と種直は授直の位と叙し能前を以て任に  
小松内大臣重盛公の女と其子として授  
直と嫁せしむ以て平家と親とありし重盛公の次男は  
太宰少卿と任たり増多は安國船の押へたり又ち  
ち宰府の位を授かりし岩門少卿は授直の位に在りし  
京田は授直の位と成りたり治承四年六月 後白河

法皇福永と押籠と号せしむり時安國として授直  
及授直の二男少卿兵衛重國授直の子と其氣之帝勲授  
直の子山崎平次重村と云授直の子余余授直の子  
原平盛重村少卿と云法皇と福永と云ふは成格と云ふは  
と云ふは授直武士岩門少卿授直の子と授直の位を授直の位に在りし  
其後 安徳天皇乃供奉して平家の一門都と出奔せし  
時授直の子余余入内侍して安徳と云ふ國と 安徳天  
皇と我岩戸乃館と云ふあり太宰府と云ふ館と云ふは  
はく是安國位人緒方之帝維義源氏と云ふ一太宰  
府と改んとすあり少卿は三位中將維盛見方と  
是地は安徳直以下有軍と云つて防々れども多勢と云  
一雖く 安徳天皇太宰府と云ふを以て箱河と云







村とて一建久の年と故免もて此國より高祖の内  
安堵せし一家の子高祖は伊人池集りてとて高祖代  
家臣等も及ぶる程の多極りてとて高祖の御前  
國信五郎の侍高祖明神の社智上京兵庫とて勢い  
あり去あつて一編を以てありおと入しと甲斐とて一  
領掌して持直の四男種成 後一甲斐守高祖持成とて一  
高祖の御前とて高祖の御前とて高祖の御前とて  
婿とて一力と割て高祖の其勢い高祖の御前とて  
押領して武威と國中とあり つと京け時この高祖の  
田記  
城も再なる築りしとて高祖の御前とて高祖の御前  
とて高祖の御前とて高祖の御前とて高祖の御前  
蒙古費りありて高祖の御前とて高祖の御前とて

後高祖田五郎種之戦切の巻もて鎌倉將軍惟康  
親王康義の御教書を御りし其後高祖建武の世  
乃れ高祖の武家方とて高祖の御前とて高祖の御前  
とて高祖の御前とて高祖の御前とて高祖の御前  
りし高祖の御前とて高祖の御前とて高祖の御前  
記高祖の御前とて高祖の御前とて高祖の御前  
雷山とて高祖の御前とて高祖の御前とて高祖の御前  
護所とて高祖の御前とて高祖の御前とて高祖の御前  
暦應二年高祖の御前とて高祖の御前とて高祖の御前  
せし高祖の御前とて高祖の御前とて高祖の御前  
く高祖の御前とて高祖の御前とて高祖の御前  
將軍足利義教赤松満祐入道性具とて高祖の御前



戦せしきまのひかりをひかり將軍の威おとす(高山  
山名細川ハ勅命とも思ふに武命とも思ふ逆  
威とすのひ兵止時あり義政お績て征夷將軍の御  
らうとすも尚又威をせしむ細川勝元山名持隆入  
道公方茂一洛申として七十年合戦一と余堂  
活由と多事年久し時時天ちちし乱き一日片時も  
あつた中お國の二回防と大内を去る大友薩長  
嶋津島のとく時て威と逞一と山と名強弱と好む  
と時より大内助多と良助良義弘其子持世政弘と代  
九列の探頭とあ績し成叙と當り九列の諸侯彼と知  
し石後といふ事あり一と田兼三と族村月波多江原江

上と京と橋おつた内家と一應仁の大乱も洛申  
とて戦切も其後大内在帝と義興武家れお領儀と  
時永正年中洛申舟圍の合戦と京田徳政と真種波多  
江中勢お捕獲廣大軍と退河川政隆とお果し是利  
義植征夷將軍と再仁とありと武切とよ  
まうとて沖威收と切しは叙と加へおかくて年月と  
行るよと義興の子後二位太宰大貳義隆天文年中  
と家臣陶尾張と晴資 全善入さ りるに と号に 戦て  
と後陶全善ハ毛利元就の爲と亡る是より前真種  
と男京田五郎と大内義隆一字と授け隆種と号し  
細希とて任は後と刺殺し劉雲軒と崇と号は此人



武勇は養老にて威と迫境より入りけ前志平郡も中  
通より奥の地士もとて大友方成りて是は好士岳といふ  
城と大友義煥は一族白根新助法廣と居りしり志平郡  
の養正といふ元国古名由比泊山金丸といふ郡士彼より知  
りてこれよりかきとるひかきと京田洋正少弼源次郎與權弘治  
改元のより羈旅の陣中にて歿す家累も敬し及ぶ  
て向一男澄種危角して家と無人なりし大友宗麟  
と世帯と押込をんとすうとて澄種恨をといふ  
毛利元就と頼朝と大友と歎す澄種を子とて武徳を  
賞封養正を子とて士率といひて家門おもしろし  
と國より入りて永禄二年七月相子岳の白根新助法

廣大友宗麟の事知し依て京田の宗と云ふ人と企  
二月十九日奥志平の士泊中務の補源盛家といふを帝  
純家由法と名を命ずりて大友宗元を在國宗元と名を  
宗とて法誠後守純法貞松源新源正行といふとあか  
しむし頼朝討頼朝とめくしと立派な頼朝加勢といひ  
て頼朝の禁少金取して押込のりり澄種を子とすといふ  
とてこれよりけいといふ上京より思へてわし山邊といふと歎  
のりり城切つて澄種遣兵と揚て八百余人といふお  
とむけく狭野といふとこは白根忽り故少す城のわたりは  
歎亮漢といふといふとて池田川と名とありて大  
崩といひて好士岳といふ入りて頼朝方と打た首級二百



三千三池田下川系と横並へ傍岡と揚てる祖と申入る  
け時志平部申通りも後京田り多し入彼所の流人ホホ来  
とある新冊ハ元龜二年冬後とあり柑子岳とハ白柀進  
士三勝と云者と巻一龜々元龜二年二月廿八日又を  
市馬場越前守書内志平として志摩郡中過りと申す  
分りよりすへるは進士池田下川系と合戦と結び  
志平部方故心して進士と申すなり ハ申志平部  
の時ありけ時  
波多江丹後守武勇の働ありけ進士と申す志平部政所  
職として柑子岳と在陣し分り驕て色しく脱りゆと部  
士後考もろと云分り松多しく移し軍と記しと志平と記  
とす事度と云元龜三年二月十日と云と志平今分り

長沙門と流てゆり多くと記しと云れどもふけは又軍と  
おこして京田と記しと云り申す故り為ると記しと云り  
榮之勢いも大なり志摩郡と志平と云れんといは白柀  
おこしと云る事も縁と以て志平と志摩と云れんといは  
志平部と云も大なり方ありしとも志平と云れんといは  
志平と云る事も志平部申通りハ既して志平と云るとい  
ハ白柀と云て後志摩郡四百丁と云るの事なり  
西と志摩守志平と云る事ハ志平部と云る事ハ志平部  
南ハ志平守志平の故なりと云る事ハ志平部と云る事ハ  
志平部と云る事ハ志平部と云る事ハ志平部と云る事ハ  
志平部と云る事ハ志平部と云る事ハ志平部と云る事ハ  
志平部と云る事ハ志平部と云る事ハ志平部と云る事ハ















澄信救郡と云々廉け勢の強大と成るは恒玉を以て手  
に入んと大田原に八重友陽の二子史素人と添て紀前國  
無呂津の山城と高部押佐といふ所と勅をたり高田澄  
権是と少歌と城りに入きてハ西より入んとて好士岳  
乃印祥押といハ高田情も其人大京中務鬼本と其  
身ハ國士と稱てハ余人と號てハ高田原と出張し五日  
對陣ハ紀前勢猛軍と号やもたん紀前と門返すと

恒玉城 竹筒ノ滝古城

雷山の西北方山上之高地なりけ城ハ人皇甲子六代孝謙  
天皇天平勝宝八年と太宰大武吉備朝臣真備とて  
此城恒玉の事と司としり六月甲辰之事始り真備

ハ任果て都の上とて一也 祐徳天皇の天平神護  
元年三月と又太宰大武從四位下佐伯宿禰々毛人とて  
恒玉の城と築く專知宿として神護景雲二年戊申の  
成乾て一より淡口本記と云々なり物とハ十二年と添て  
学部の切をとり淡口本記と云々なり寶龜六年壬午  
月壬戌吉備吉備亮云々勝寶四年乃入唐副使廻  
日拜ハ太宰大武建議創作筑前國恒玉城之寶治七年  
切夫畧畢ト云々是と以て是ハ恒玉の城と吉備云  
の 朝として始て築むハ城之實もけ人ハ入唐して  
その向の恒玉尋常人のあるるとハ無漏なり故一  
吉備公軍初ハ一ありと云々續日本記  
天平寶字四年の条より云々



根を強しり或いは備備を道ハ怡玉の城址りてハ  
へうひとて人あまこと古昔の城ハ只嶮とありけり  
と蓋ては河を流す地と定めぬまハその城と築り  
こくせう海をさすまき河と隈とハ是今を知りて  
いへば城を知人の評瑞也○筒に漉して雷山の西の  
山谷より少く向へ流る嶮より谷の茂只ハ尚高  
乃上より下りて長く大なる石の橋とてわづら  
水とて内より流さる水別筒の漉て橋の上ハ城の  
口とまじると云石の橋ハ砂りてはまきり橋ハ一  
申と名をてきて二の水門より水と通すも三人長  
七り余り門の礎のあり強しり今も石の橋より水

流して谷のちと流る事件の筒の中より流して出る也  
少く筒に漉と云之 橋ハ上下とも上筒下筒と云是水辨法  
或ハ筒の中より上筒へ水と通すハさるこ  
ハ漉の水ハ岩と供へくある事百餘ありて嶮の流  
英系ありはとてハ長くさき漉ハ他邦に於  
ていへば是ハ雨中又る後と名増さる時ちりて  
布とわづく川けるや一ニ二里ハをまきまきりて  
其のハ長船村布村赤村神村加布里と経て海  
入筒の漉の西ハ迫きはては旗振とてさき尖りて  
せりて四方と見えくはハ怡玉志ハる歌眼のち  
水の方ハさるくハと見えくはハ織船の位来と知  
んてさくは城と築て異城の襲来とてゆへ旗振り



炭の兵庫と比つてお家の旗と少し迎御の兵士と招  
けりこのゆへこそさうう岳といふや又旗振うう岳  
の西南とちいさなる城址あり其よりさう改むるは京  
田氏の旗下西に近信兼京田澄種と少くは紀前より  
與せしと京田氏はと改んていふれはけりいふ事  
翁よりいふ信兼終と京田と改こころ其事空珠  
岳城の条よりいふべし

薩京村古城

此村の境内にはさきの城とて波多江上総助信持の城  
のありき前京の城といふ事ありしは名付いふん

飯場村古戦場

け村のこまきれつとつりあり水奥より十丁よとあり  
飯前北前境とむり京田と京と龍造と隆信の信神  
代氏と合戦せしはなり

公領

少倉村古城

この祖の城は京田と京と端城よりとて

加布里村古城

京田と京と端城より岩徳河内とていふ者と城代とて  
麓より地海をいふ

交珠岳古城

長石村より大友家西に近信兼より在城は京



田原山が彌澄様ハ元大内家の幕下ありしころも大内家  
亡し後の時勢之勢不智して大友家の属しなり物事は  
元大内家の事とひいて今大友家以下知と文事事口惜  
むと云ひん毛利元就之四子過し忽し福報と起し永  
禄十年九月十日澄様ハ百余人と川平し長石村之叢  
向し西に近く城と書さるる結兼山城之捕籠りて  
兵と波 四と出して防々も波多に忠徳以下  
國士澄様之力と合せて多勢とて押籠りハ結兼の家  
人交へて城中に籠り澄様城より押寄て岡と地り  
更なれハ城中よりも岡と合せく出合一旦も川退る近  
きと切所家外をさきと後砲して手押ハ澄様、兵とも

進み兼てた尺へより澄様大勢をとりてきこき若  
とも備前外野の山城一ツの時別と移す所やあは  
いと澄様ともあはせしめて馬と乘るあり出のま  
あり國人余れを力とま向しうけし勇猛とてけり  
切なり京田の赤尾石井上京鬼本馬田池園おきとえ  
て澄様と川とあまきり部く合と毫毛よりも押入して  
西も振す進みは西を長石の城とありて山は  
ひし一雲山の峯とありし敵軍とてまねきり  
澄様透りなく攻りて撥と拵て射々もハた近  
かりやあひんをたてて雷山鎮より岩と川籠  
かりと京田の家人並國士忠徳波多の京と前後り山



ふこして逃さうとて西尾道六款數十人切つて以後播  
切て休まらうとて小家人四十余人をたつり或り害し  
或る失跡十余人生捕せしむり隆程ハ西尾道内陣と  
稱し深江吉井と改んといひるハ元來京田志あり  
國士多しハ其後及久保孫守隆程まらうとて逃し  
志平部中過りし備さ出た友方ハ國士給人と逃出  
ハ部好士岳の城と改んと稱すハ友方の一族白  
林新助隆慶と城とて志平部の成程と司しめ  
ハハ政所と号し是に依て高野の内にも友方と從  
國士由比伯火丸元吉古馬場松隈等詰りて  
用ハ繁しかりとてハ概く攻めし難くと京田志程に  
入る

公領 有田古城

城主ハ郡士有田周備と住まると言傳へたり

同 深江岳古城

深江岳を子有京の上山とて二重岳と云ふ山の上  
城址も又二重岳城とも云山上に白山後櫻の社あり  
其山村のうしろに高き山あり水碓の山あり京田氏の家  
その中勢を捕結承入を京揚とて住す其山に陣の  
尾とてあり其山高昔畑三河守と大内徳鳳と合戦  
一徳鳳亦負手田孫を奪つたふとの事あり其山の方  
杉山の中二首堀あり其城と云ふ人と傳へし城といり  
塚の上之地蔵堂あり其山に淀川村と昔ハ川とて



右大田氏戦の討死の士平丸血川に流さるるに依て  
い名あり柿右衛門と云ふ事あり其先祖後藤氏の  
事にして即井原の事あり平家の一門に別れに遊あり  
一竹田國の士多し平家と離れし事あり長平始  
終源氏と心を寄せた二のちといふれ頼朝より後  
ひと恩誼と存く流るる事あり東郷も是なり其後高  
事あり今も元弘建武天下大乱の始なり宮方と心と  
屬し忠勤と抽けり曆應元年秋芳野親行法皇宗  
信の法國も愛の宮方と慕くつるも後高しハ菊池松  
浦鬼木事あり山麻衣北赤星と云ふ事あり累代五續  
して中勢を更永久の事あり中勢を更永久に揚ぐ代

とありて天正年中、秀吉公の爲に亡ききて其家  
の縁せり又二城岳の麓とて塙城の地あり是も城  
の若りなり

唐澤氏 吉丹岳古城

吉丹村と云ふり此郡に吉丹た京元隆光居城と云  
傳ふ元龜二年二月紀前國事あり而種吉と吉丹  
た京と依地れ城と稱して國争り及んとす事毎  
夜といふ事野宮あり是田より栄つて男ありと云ふ事  
勢永久の事ありて家と継いじ吉丹も是南氏の旗  
下の事あり榮源の事あり和略と進いし事あり  
傳ふ吉丹と云ふ事あり







日次帝即位又五郎は九郎を馬の鬼本江帝位を始として  
二十九人枕と並へて戦死す。さるるは、吉井の忠義を  
吉井左京の館に、信時の子の吉井の忠義を、吉井の忠義を、  
これハ者一騎、池より命と蒼蒼と、信時を戦ふ事  
野上村下之夏目の戦い、おるて人殺若干討せ、鹿家  
と、手紙て、吉井の忠義と、川入んと、さるるを退けて、首百許  
おる、鹿家、信時と、切けて、信時、吉井の忠義と、川入んと、さるる  
京田も、是と、吉井の忠義と、戦ひ、さるる、吉井の忠義と、川入んと、さるる  
も、軍教と、さるる、と、吉井の忠義と、戦ひ、さるる、吉井の忠義と、川入んと、さるる  
吉井の忠義と、さるる、と、吉井の忠義と、戦ひ、さるる、吉井の忠義と、川入んと、さるる  
死骸と、川入んと、さるる、と、吉井の忠義と、戦ひ、さるる、吉井の忠義と、川入んと、さるる

あ、う、え、と、す、日、二月、十日、大、安、室、鎌、の、事、知、と、う、て  
安、東、某、好、士、岳、の、城、と、さ、う、白、穉、新、助、と、お、後、て、吉、井、  
吉、井、信、時、と、す、り、て、お、勝、せ、り、し、し、お、勝、せ、り、の、ひ、な、れ、え  
京、田、と、い、ひ、視、入、場、際、火、金、丸、氏、部、を、捕、も、小、金、丸、は、小、  
山の城と、入、り、

鹿家古戦場

天正十二年三月十三日、北前國畑三河、吉井時義、前、吉、井、乃  
城、主、京、田、下、野、吉、井、信、時、と、此、河、と、て、お、勝、の、合、戦、ひ、を、戦、う、と  
尋、り、と、京、田、洋、山、少、弼、入、是、と、京、田、病、死、の、後、於、涼、山、野、と、  
信、時、死、前、松、浦、の、京、田、中、督、お、捕、京、田、と、信、時、と、戦、ひ、  
これハ、京、田、家、中、士、と、も、の、賞、罰、ハ、さ、る、る、と、さ、る、る、と、さ、る、る、



の所へ成のたり彼も野とていふも故も業の子れたる  
ありて信種と其父の方事し八系田の家此事終るまじ  
こ事こいふもねも既と系田の旗下と信種少年といふ  
もあふに其と一族宿老も力ある老士あまこあれは  
もあつる系田家と進止する事方終るこつて請り  
合たりかくいふこいされて後と信種も中勢乃口入の事申  
遠近の奉々やあんと老をこつて果してあつてと系  
田一族の老も法事と就ていふ事たろと然と  
他國に沙汰し信種も夫のさこといふるこ依てあつて申  
勢後えすこと系田の高長これと始末あつて討んとと  
請りこつてる物こいふこといふ人あつて思ひ海り

もあつてと系田の信上松浦の境とて山川と押領  
せんとする事あつて系田信種とていふとしてあつ  
の者も情り思ひつる妙と知三河あつて方より二月迄  
後家の使者として畑掃部助といふものさつと申す  
家もあつて酒敷助と及の信種と士と勘助とを老と  
軍初終るとして畑只論と及小勘助と兄と大炊助と  
といふ者中と病擔し掃部助と教つてとあつて初段  
興小掃部物もこつていふと其兄と細て掃部とていふ  
といふこと係に其後と有田固情も鬼本信種も老切  
乃者も持たしとてとていふ掃部助は三河あつて  
あつて余の師とあつていふとて一族の掃部助







幸く火を敷して切せりたるをくく系田久勢其勢の上  
碓易して敵を迫り置大炊助はよきてあまふかの  
小勢と切せりしにひらむに敵やあつてく掃助の首を  
味方の勇と迫ると傍若無人と敷一兵一騎馳出  
くまひに分助助石井内膳富田四郎を系田園に馬女  
長監物西三右衛門波多江丹後守朱雀小次郎上  
系田市を信大田庄平命浦志遠をら新系長つ吉  
兵庫助と指して五十七騎つめて掃助助り二十余人を  
取籠りんとし掃助助のあつる馬の車首二太刀切れて  
友房のこころとふりこころを直に飛りおりのまて  
戦ひたるあはれたもあはれ死にけりも方七痛手救多

負ふ道は自害せんといふをきくとまはれ大炊助の若衆志きり  
くまひに組て二カさう大炊助の首と取れせりしに七守  
向ひける勢と呼せり信綱へ多る二の自是川へまはれ池  
田徳来以下は軍れ士率に陣を崩せりしに一陣破きて  
残黨全くとしにまはれに細り獲られきて多知ともす  
は魔りもと下は信とまはれに系田信隆を陣  
下りてあつてこの系田大敵とあつて競ひあつる信隆は志  
系威の権と若衆と馬を系田大敵の獲りて  
こころをいへりしとおつりしに先を進ませりしに系田人  
死と一采もの内を獲りて喚て逼りしに細り形の如く  
信とまはれに近合きて戦へりしに先を獲りしに特



退走し是右往左往と成て地の用と云は旗本の勢  
も往病ころ付て川多しを足へたりか致変りし京田の  
お家信保の共前も良治五百余人とて保の岳の城より  
お出ぬとて海より夷より吉井左京亮橋本より  
横合よりとて入て畑の勢一度とつと崩きて山とに  
て川退く之河もちいつく川へさして唯一騎とてまうて  
退てゆく歌歌とて新より実成り大將と組んで移遷ん  
と信保の馬名と目かけく移も近んとしころと池田を馬  
逐大川野を逐圍九高を勝おと云畑の移まつころ常士  
十六人川也してこいころ事とてやとて馬の口とて  
水のころ川向雨の川流とつと退来る歌と訪き致お

ころ之河もは是非お死せんとて馬れとて川也一近  
おさんころと池田を馬先を絶とすつて川と之河も  
刀とわけてしよとつて池田の甲乃種とて三子おされ  
も甲もをれハ碎けつ其付ら勝地おて制しなれハカ  
信保つて川退く是事とても之を祖勝進来りなれハ  
池田を馬逐大川野を逐圍九高を勝おと云畑の移まつころ常士  
十六人川也してこいころ事とてやとて馬の口とて  
水のころ川向雨の川流とつと退来る歌と訪き致お

信保より京田の常留す柳畑京田旗下の代氏争  
外の歌と云はしつとやとていん散とてこの歌のなれハ







澄輝と云ふ人と企むる新助志士等の壬辰中務お備  
同又右帝由依のまゝ留りてお侍下ひ物に違は  
れりし立派なる橋わた加勢と云ふ京田と妻と云ふ人  
澄輝いふまじして白旗と云ふ人柄ありて互に  
合戦止時せし或時澄輝好士岳の城と改りて城  
中兵糧盡さんとすりし立派を雪けて違はれ  
し柑子岳と云ふ城と云ふて詮議ありし祖の城  
と人殺とせり改りて柑子岳の妻も根城  
と改りて事やと云ふ祖へ人殺と云ふ  
と云ふ兵糧と好士岳と云ふと云ふ雪けり軍  
勝ふる百人生利系と云ふ物も柑子岳の妻も

河内川に別と云ふ祖より兵百人出でて立派  
と妻討とりけ入れきて合戦せし終りし祖は勝て  
そ雪の人数と云ふと云ふて川をたぐり具殺柑子岳と  
改りて城の中を結防きて居りて城一は  
妻を尽さんと云ふ人殺と殺し違はれり  
りしと云ふ人殺と云ふと云ふ先永禄十年乃  
去立派の城と云ふ但馬守澄輝の事と云ふ  
家の伝説と云ふ時白旗新助も是と改んて  
少陣と云ふと云ふと云ふ京田勝柑子岳と押寄  
て争われ新助いしと云ふて柑子岳と云ふ  
勝ては河内京田勝と進出し城と云ふと云ふ







潤村古城

日向進吉備徳氏と大友氏の家臣として志戸郡の政所  
職と勤り柑子岳と在城すう言祖代城と京田厚正少  
弼澄持入をう常ととんと稱し後を交り元龜三年四月  
十ろろ了榮宿願の事多て今村の昆沙門と名稱しけり  
と稱しととととけり八月廿八日柑子岳とお出る京田  
う西谷とお出る京田方よりいしとす大勝とてお出  
池田河系とてお出る戦ひをう進吉備お出て泊の城と  
池のんとお師の平等とすてお出ると言祖勝寺中と  
池より攻り進吉備と初として高後二十八日時辰振  
切てたり進吉備と首と西海の事とてお出るとなる

志戸の初吉備或は討て或はあがり進吉備の軍の多しと止りたり  
かして進吉備の墓と平等とすてお出ると言祖と山岳と  
指し日向勝と名付しとや今山岳もこの墳とせり  
て入るすこの地も明りしけり

馬場村古城

此村中と古城の地あり志戸城と号し是大友氏の家臣  
古居徳吉の居りし城あり馬場城後と云し古居  
在城とすしとや

泊村古城

村より築くありて城地と是泊中勢が備徳家の城  
ありあり其前泊吉備と云し古居在城とすしと云







近辺と押籠をんとしそころ志二部好士岳の城と日向  
新助を成して志二部の凶所祿と崇りりきまはけしと少  
後河の治文中比紀伊守兼小室丸九郎兼持波多江上総  
助持持波多三人と名をきし双方とてせめ戦とやう後河  
と元長右衛門をまゝと記して元長は館と押籠を倉庫と馬  
場祿後に記して囚人の如くしてを並りりりり後出陣と  
記して不知と記してふ解けしと少ちいりり泊見才と  
其後とや一萬田平らりりり後河と追殺し一倉庫は  
流せしむる後河を庫の所二十九丁と新田と加て肥  
前国住人松浦堂の流人園口出雲と流り泊出雲と名  
宗たることしむも出雲八年をこれハ長男中務少輔法家

しとちあまのいりりれ  
又村より西とありて大日堂の上とて城址あり是ハ  
泊内宿といひりりり城ありしと村民ハいりり是名代の  
末子の名ありりや

元園村古壘

是ハ郡士元長右衛門をまゝと云一者の居所成りといふその地  
切妻ありと云一城あり城址といふ人ハ



筑前國續風土記卷二十七

土產考 目錄

器用類

造釀類

製藥類

土石類

禽鳥類

毛群類

海魚類

河魚類

外類

虫類

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 筑前國續風土記]*



筑前國續風土記卷二十  
 會通縣 志保縣 志保縣 志保縣  
 善田縣 立野縣 築前縣 志保縣  
 上武志 目錄  
 筑前國續風土記卷二十

筑前國續風土記卷二十七

土產考

器用類

刀ノ一ハ右ノ宰府方智山ノ正應と云ハ漚治ありハ良工と云ハ  
 額切丸と云ハ名刀と作リ事載てハ俗人の口解スありハ其  
 後博多と西蓮と云ハ漚治を安藤國の良西と云ハ其ノ  
 子シ能刀と云ハ上京に移るハ筑前國津儀江西蓮江原國  
 吉と刻メりハ漚治ありといふの博多其子と沖原江西蓮安  
 吉と云ハ貞和の江江と云ハ西京に移るハ其子を上京に移ルるハ  
 たノ字と刻メりハ故ニ世俗たノ文字と稱すハ是ハ西京に移るハ  
 の上江一字と用スるハ其子と云ハ仲原ハ昔博多神のミコト  
其子と通じて其の漚治より



在岳子のつぎに入海あり唐船あり  
之入海あり水の陸地と仲候と云ふとや  
す是ハ建武の対れ者として始りハ  
カレ候と只源安吉と刻り後ハ五郎入道正宗の才子  
とあり仲候在唐の帝と刻む又たの二字とも用ゆ  
の才子の才河と云ふ者も是又徳力と作り候ハ  
才河と刻り安吉の子孫救代お績て候治より  
かきけしハ一石記

金剛を唐盛國と云ふ者も博多に候り始り山伏あり  
之又とて仲中國の船治ありと云後ハ船治と云れり  
母ら末ハ文字の女ありと云孫三代た盛と云孫す  
之後も救世お績て候治より多たれハ云一記ハ一從

と重利を采り元祖と云意ありと云意り末子と寛門山  
の平石坊者子と云一二代の後ハ金剛兵衛男子と云  
して平石坊の子と云ふ世と云はつ平石を別と云  
と云り是等々地りし刀短刀尚世と傳りて人の變と  
なり候り又入西

長政公入國の後信國下坂をくし船治を招きて福急  
と云りめ兵衛と云りし信國ハ京信國ハ東條坊門  
あり代々信國と以て之家号と云京信國ハ東條坊門  
と候て三代船治ハ四代の信國ありて此前ハ字修より  
安心院吉門と寄託せし吉門ハ罷過せしと名宗の  
字と候りて吉宗と号し是字依信國の元祖ハ九代



安元院家とはゆかりの安元院と天正の始り孝後大友の  
攻之とまじくお級ぬきまじりて其時の信國吉貞も浪  
の舟とかなりし。 黒田孝高公孝前と仰りまひてのり  
信國と招きく兵部と化しり思前海軍とありきとを  
長政公孝前より流布へ移さんとし其の時信國吉貞  
とより我流と慕ひ流布へ来りてし其教と流すぬ  
是長七年二月流布とありし。月捧と流す。屋宅白  
流とありし。孝へ過す。吉貞父子二人も子孫今も  
ありし。其家とありて流布とあり  
下坂も実兼吉、末裔と云流す。 長政公の討下坂兼光  
とありし。其列長流より招きて福高と流す。其

孝子孫も流してし。 長政公の討流布大  
一文字則宗も孝孫もありて福高と流す。孝と兼光  
三子流布とありて世に孝名留しりし。孝とありて流布と  
流す。其刻りし。孝あり  
家流の流す。 長政公の好むし。 信國吉貞始て流す。出  
せり。池田とありし。其製ち孝を流す。其心と流す  
の如くして目行定とありし。あけ柄の先と其家乃  
由と流す。目行とありし。孝とあり。又軍流す。流すの  
身計り多し。流す。軍用と流す。本林の先と削りて  
流す。内とありし。打とありて用ゆきとありし。武流す。便あり  
其前 齋 信國下坂と流す。其



鐘 長政公は國の王に如く治りて後西人と京都より  
下りて倭寇と云ふ者並に今も之を孫として鐘と鐘の  
製法はあしく軍用と便し

鳥銃 長政公は時泉列城より鉄砲匠と招き下し  
て福島の所にして鉄砲と造らせし子孫人より福島の  
所は之を傳へて小銃大銃とせし是と流る城傳にお  
とよみ

羊角 長政公の時人菅原と云ふ者命じて始て  
此を造る者唐より傳へし其法を知りて之を  
比せり水牛の角或は海狗鬣とても能く造るは牛  
の角とて之を海狗鬣と云ふ弱く造りて用は  
す

けまられ制法甚精くして他のら直是を造る事能く  
凡口をのらむ長一唐玉のらむまらるるまらる唐玉  
れ制法よりまらるるまらるるまらるる短け  
まらる軍用と利あり

鐵鎧 福園とて制す本地の鉄と草にて包み纏て  
塗まつとして軍用と便あり先君 志之公の好むるも  
皮匠 漆匠といふものゆゑなり

芝草屋釜 此國を望都郡ありやの里又形河郡博多  
れ村ありて漆物師ありて釜鍋等の類と鑄る中を  
芝草の漆物師とて元祖元朝より傳へて漆物の上を  
ありしりハ 禁中より宮と仰り氣桐の沖紋と 沖免



もて教家忍得と河入り其清一家の釜と若尾釜と稱  
す上野國天明釜も是とつたりとて茶人此釜を  
釜と画す如の故と画信雪舟の圖より河内とあり(雪舟は  
備中の人)して大田氏の招と意して河内國防團長田舎の  
姓もせり清物師故とて釜の模範と画しして是と稱し  
と也 長政も入國の前と若尾釜と治工教人をしり  
あよりあつて好釜と稱す事ふ能く世とて治工の級  
せり博多の釜と治工多しとて釜獨多と制す(若尾  
と釜釜所といふも余れ所も佳す物中若尾の清物師  
のを孫博多と称すといふ)及も此も此の釜と  
ふるも此釜清里も治工店とて釜獨多と制す(此の

釜をいふ店といし治工のを孫ありとて其制法頗精一  
つとて後といふはつとて及も此の釜清里自れと  
清とあり(獨釜清里) 組 博多所竹若といふ若の釜とて制す(其始ち竹若若  
清といふ)の男子とて文十一年と筑紫氏の末子鬼松  
と若子といふ鬼松成長して竹若惣匠といふは若組細工の良  
子なり 秀吉も九列下向の時博多より種々の釜物と奉りし  
といひ惣匠といふは天下恭平國土安穩月日  
浪清と組白て被せり(秀吉も斜をいひ悦喜一海  
の時被る)とて慶長として始りたりは竹若一家の居り  
所と竹若若といふ元和の始りり細場所と稱す



唐織絹 博多にて織る所は博多唐織といふ一博多  
唐玉舟舟の町ありて織出せり其町は博多唐織の  
家七十軒ありて織物として諸國に販たり博多唐織也  
し帛はきこし今も少くして玩具とあり雪れ下竹下を  
の類あり 長政公は時御所彦之帝と云者唐織と徒  
とすハ休若家と云と知りて織る是より前ハ休若  
家ハ細糸との業とせり今ハ唐織のきこ竹  
若家より織出せり  
唐織帯 右ハ白一うけ紋を唐織乃紋を唐織の  
紡帯とすつとして久敷と博多唐織と瑞雲ハ  
生絹 休若家より織出ハ其製法を籍し

櫛 文福の始ハ長門國船本ハ櫛ハ博多にあり始りて  
櫛を製せり今ハ片上店一町ありて櫛匠にして是を此  
と云とい所と櫛匠といふ一ハ櫛業櫛とて名物ハ  
しハ古所よりあり 拾遺集 天曆冲製  
つるハ心とのをほし櫛とて名をたし知れぬ  
櫛業櫛とい國として作す一ハ一  
金銀箔 一ハ博多にて制す其所と名をたす云  
と云櫛とす  
苗深物 櫛匠郡山江村ハ苗谷と云はる昔ハ江村  
苗とて深或ハ考後より苗深買年より深なる寛  
文の事より櫛匠郡飯塚村と深じ色鮮にして久敷



と評すも愛せず

唐取瓷器 朝鮮陣の付加後主計以清正故由て  
瓷器と製する者をつきあひて後とて瓷器と比ぶ  
其者の名と井土新九帝と号せらるゆへに其制とて古と井  
土焼と云後、長政より招きて筑前と呼ぶ者あり  
子塚水雲と命して水雲と名付て其器ありて  
瓷器と制せしむりて古取焼と名付てとて是を称  
す安長十九年の江戸に轉り其器と云古と命しと  
流石と製せり 長政より八務と云古と命しと  
焼しと後 忠之公の時寛永七年のころに極波郡合  
屋の中村の内に移りて焼物と製

せり寛文七年より上野郡越前とて陶器と比ぶ  
其製精しくして藤原と云古と命しと  
高橋と云古と命しと

中野瓷器 天和二年より上野郡中野と云古  
とて陶器と比ぶし是を肥前松浦郡伊万里の  
陶器と云古と命しと其器と云古と命しと  
精巧なりしはとて之を古と云古と命しと  
伊万里と云古と命しと

箱崎錐 箱崎郡箱崎村小笠とて假治の製する  
其の錐鑿釘工高の用と傳ふ中にも推し利き事と  
新造と云古と命しと其器と云古と命しと



しうりて八幡宮の擬匠とて其元祖苗とて  
事と好し石小苗擬匠とて

久原鉄器 物産部之系に擬匠とて  
雲刀鎌 割刀刺刀ホの鉄器とて此の福園博多及他邦  
にても多用ゆとて其子教人のつくせとてつらて鐵匠と  
なりぬ

舟蓬 志摩郡之東崎とて製す其製法よく  
他邦にて作さるる物とてゆくとて其とて東蓬と名  
つけぬ品とて

上産紙 近年上産紙とては、是紙製す  
合部紙 近年形物部之品村とて流る其色少

黄じてて可くその子紙とて出給事なくして  
久之信且語字と別とて書とて一考とて可く  
なり

形會 秋月村とて製す國中及他處へ多く賣是  
と上ぶるに京都及江戸とて製す其物とて定文  
の中はよくよく福園博多も亦由中ゆくとて此の  
者多しとて秋月の友及むハ士民を譽と買す  
か一皆自のよるとハ譽と賣す者多しゆとて其民  
すてとてよくよく者を掃く

朱 昔博多の葛満田助屋つといふもの中兼とて  
朱とて事とておし得てゆり博多とて是とて焼て



後京都に集りて色け地うり傳ふ道來と博多にて朱  
と焼くといやくに焼くも口やく朱とやくるは博多より  
けし白きなりと云

脂粉 赤産郡子馬村とやく婦人の化粧に用ひる  
粉粉よりぬ好品なりと

紅粉 博多の町にて製す其色をより  
秤 博多中崎町と秤金粒家よりと云と伝ふ  
又秤の遠くると改りしなり

土器 多良郡飯盛村にて地りぬの土器をより博多  
及赤須郡日小村も地りぬの土器の製すより及

瓦 博多瓦町にて瓦工の集り伝ふ所一坊あり瓦瓦

及よりつくれ瓦器と伝ふ

捲 捲物師福高博多よりあり捲く形河郡馬出所  
ありと捲とつゝ福高博多に制りたり

漆 け木上産物とありそ外を掃りたり  
掃漆 け木より多し山村より多し七月より後氏皇と

博多福園と賣て家産と物く  
塩 長政公入國の後塩漬をけり海濱にて塩と

多く焼せしむ凡塩を氏食軍用と切りし事と穀  
とつけぬし塩漬を賣しをふ海濱をききし所此

塩より塩ときりすいし事なり  
魚より塩ときりすいし事なり  
市より海味と高しを賣りたり買り



造釀類

博多練酒 白酒より其色赤絹の如くなるもの  
練酒と稱す其色は白とて濃しとて練酒と云  
物とも用ひると云練酒と云白酒の世より  
初しとて事と知れぬ牡丹系肖柏の愛記  
の酒と云此の菊元野に出群るを求む書り  
肖柏を大永七年と記す元禄十五年壬申歳まで  
百年間年々及べり肖柏の酒は酒既とせ  
とて昔よりわかくとてさき名産ある  
とて小田氏の家の酒と云是とせり今  
多し錦中藤崎氏の家の釀と上品と云  
味は是

大やう五仙と云はるも之を以て其製法の  
精後事と知れぬ此酒世にあらして他邦  
す他邦の酒家には酒と云ひのりす  
とて博多にて製するに勤むす 國君より  
毎年十月 江戸と献て下る  
粟酒 は酒えち南都より釀し  
辛し近世福島の造り酒を始と  
て名をす其味甚甜美と云年々他邦  
事練酒と云はる  
素麴 他邦と多しと云はる博多にて製するに及



極品を其酒より事饅の如く鮮白よりて煮て  
京田氏より祖傳と云し何博多に商人言田舎町始て  
素麴と製して捧く其後小早川隆景其義子秀  
秋の町も昔高節より孫の家より是と教をり 長  
政公入國の後父如水公は戸部越えあり 大君と教を  
りて其例としてしるはるる初秋に國君より  
大君と教をりて法家も始りて是言言田氏の家  
物なり

檮餅 博多とありて其の本は葉とやきて灰汁と  
並と深て製法より取るとも色黄くは味脱とよして  
甜美と味ゆよりあり買者あり是實水の初年言  
と博して檮と云はれり

東京餅 糖と黄麴よりて蒸し揚てのり小豆と油  
種と交て餡とし煮て又ひいて横切して食す其形  
山伏の形中よりとりては巾餅と云或東京餅を  
いふ  
酒 近年福長博多より製する酒言其くはるる  
南都北都の産とありなり新らしき松竹く入大坂  
くはるるは彼地より人も亦大坂の産くはるるを辨す



と手福園博多の酒家にて種々此酒を醸する教  
あけり希少なり此酒は酒乃名とあつて白く  
直方にも良造と此の寧ろとも深川思川を  
酒と醸す其味は又福島博多の焼酒と  
多く製す

葛蒲 福島博多の町にて醸す海後  
とやく山台葛蒲を醸す者多し月日酒の製  
するよのむ美し江川葛蒲と称す其製する色  
白くして清し灰食ハ柔として其常の葛蒲と  
異なる志摩郡八咫河の製するものと亦味  
豆腐 昔ハ其製ありしと年京都人亦大に製す

其製法精しくして味美し酒なりと云つて精しく  
饅頭 福島博多に多く近年中流所ハ京都の人來  
りて製す京都の製する及とも又味美し元禄  
十四年博多川開府ハ京都の饅頭と製する者と  
争ひし其家ハ是と比しむ其製を精し日本所も  
製す福島の製する不及

寒々具 福島博多に多く製する者多し其京製多  
多しむくハハ所  
のそ有て  
他品多しし甲午年以來長浜及上方より傳へおいて  
製す今ハ其製法多しくあるを國とて其製法乃  
製すと云くわたり







十九年にして死せり透頂香も宗教の合せり法あり  
信之助郎と云ふ信之助の官とありて其名をせり其  
子孫透頂香の秘方と傳へて世に之を傳ふに似し  
又京都にもゆく其子孫傳ふと云法陽の西洞院  
四條上り所にて信之助と云ふて其子孫傳ふに似し  
相引小田原の透頂香は北條氏政の時に信之助の秘方と  
小田原の巻にてうしむし今もその子孫傳ふて其地より  
信之助の透頂香と云ふて其子孫傳ふに似し透頂香の  
うめは地より出りて又信天隱集にも陳外郎の事と  
載せり

樟腦 秋月にて多く製す

井田原混元丹 志摩郡井田原村の農人七八十年  
以前の事と製して多く婦人の産前産後之に救ふ  
の病と治すると云信之助志摩郡の農人其後其  
製法を月茄子とありて是とやくまと君等にて客  
茶を加へ製すともや福園にて用ひりとのなり

土石類

古河山坊散 秋田郡野田村に右の頂ありて  
つげり子良部令武山遠聖部四合山麓に郡に  
も山あり坊あり法別にもありて山に坊あり  
と事唐土の書にもありて是今も天地開辟より已  
前の物ありて是後長々其の事あり



白砂 右門前より大石ありと鉄礮と以て打碎  
きて砂と成り白にして愛するし多石と爲て世との  
賞翫に供す備前國之上郡帝釋溪同より白砂是と  
同し

雲母 子良郡長垂山より出

鉄砂 遠望郡岩倉 服浦 服田 柏原 山麻呂倉  
宗像郡地崎 種崎 湊 鴨所川 大崎 和尾郡  
那多浦よりあり西進の砂中よりあり鉄粉にして砂と  
爲て 多石或は小刀 庖刀等と磨くと用ゆ  
焦米石 上座郡河川村八並長者宅の地中より  
出玉ありあり昔米石のよりありと米を焼く

石 如くありし石地中より出たりと云ふは後  
の字を乃上散心と岳字を氏と城の米倉に地と云ふと  
了伯考國 船上山下名和長年の高宅よりあり

水精 志麻郡友尾村の上よりあり六角之を聖徳  
田村の下よりあり

蛤粉 博多にて蛤殼とあり焼て粉とし屋敷紙  
わらうと用ゆ是と用てる灰を加へ用其價益あり炭  
内にて石を焼くと用ゆらあり

瓷器 土 上座郡中野より多し初め中野にて焼初  
やんとて其土の多しと云ふは氷りんとせし  
中野におのりしと云ふは地中氷り天然の草に



白礬 福屋郡久米村の山あり村氏其製法を知

五色小石 宇治郡津屋崎浦と云ふ所と五色原と

志摩郡小倉庄と志摩郡同乃川中とあり此別

老翁村の山と云ふもの類也

煖石 志摩郡鞍手 志摩郡徳波 宇治郡の内所

煖石 志摩郡入多村より出けるを焼て石原と云ふ

唐言と云ふつと云ふ石原是と注別と云ふと云ふ

石原と加へ用申

木葉石 石原と木葉の紋あり宇治郡大宮の

石池も云ふ是あり持て木葉の紋ありと云ふ

煖石 志摩郡入多村より出けるを焼て石原と云ふ

煖石 志摩郡徳波 宇治郡の内所

煖石 志摩郡鞍手 志摩郡徳波 宇治郡の内所



其後の日田とあり

温石 河川山中とありやきて身とありし又橋名温石  
と申して病後りやす

浮石 河川海をとりあり其海のかたにあり又上在川と  
ありしよりして温石とも用ゆ

禽鳥類

鶴 國中河川と鶴乃集る多し物もを空飛ぶと云く  
りしをより多しとありしを集る事多し物中云  
の爲鷹村河川とい地と集る人む多し凡河川とありと  
多く鶴乃集る多しと掃るなり又白鶴ありしを鶴  
も鶴ありし

鶴 河川とあり山中と住む地と食ふ鳥昔といは  
るし之を上方より唯雄四つとありし後年より  
多しなりしなり

鶴 河川池とありし白鳥也

鷹 河川とありしと鷹とあり

鳧 河川とありしと種多し一羽頭赤頭とありし  
あり小鴨あり又黒鴨二種一羽とありし一羽河川とありし  
ありしとありし可食小鳥の類多し

鶺鴒 河川とありし田圃とありし鷹とありしは多しとありし  
ありしとありし他國とありし種とありしは多し

鷹 種多し一隼兎鷄雀賊雀鷄亦有其外國







ニ光鳥 上野郡宝珠山志波山直方山と云々  
山鳩の如くして轉る鳥月日星と云々  
ニ光鳥と名付く尾長一尾鳥風の類あり  
青雀 青あり頬白あり青と云々  
鳥焼く一血と云々  
切羽あり

川鳥 山川のかうくく栖し其形  
鳥一くく山火の疵症と云々  
道尾鳥 蕃國より傳へし  
少く衆人よく遊ひてと云々  
鶴あり

燕 大小二種あり近年より多し  
志やく多し 海邊に多く一尾長一  
鷺 山中深谷の隅にすむ  
水札鳥 大さ刀鴨の如し其色  
之肉細く骨堅と云々  
秧鶴 鶴と似たり水すむ  
大ありと云々  
信天翁 鳥かやと似て大く海を  
時多くハ帆と死す丹後と云々  
てち沖の左丈と云々  
鶴 江戸ハ國と云々



例多し其より高きより後しよや世俗是と云業  
鳥と云尾長く好白黒交り

方目世とそと梅首鶴と云らん小方目あり大え  
と家白く少らんハ赤い赤い少らんハ味

鳩 鳩 班鳩 鴉 鷺 鴉 鴉 青鶴 告天子 杜鵑

鳩 鳩 繡眼 兒山雀 四十雀 山鶴 桑扈 啄木鳥

黃鳥 むくろ 鶉 ひよこ 百舌 鶇 鶇 鶇

鶇 鶇 鶇 鶇 鶇 鶇 鶇 鶇 鶇 鶇

毛群類

馬 牧馬 河馬 河馬

牛 犛 犛 犛 犛 犛 犛 犛 犛 犛 犛

獺 山中よりて穴を居す穴をあす人なりて是と云

味野猪の毛一 野猪の毛一 野猪の毛一

大い國の産するもの數と云れ

野牛

猪 赤弓山其外に云くあり

羚羊 上座部 山中に掃りあり

海狸 赤像部 沖島を云くあり掃りあり

麴 麴 麴 麴 麴 麴 麴 麴 麴 麴

青 狸 狸 狸 狸 狸 狸 狸 狸 狸

るはと云くハ迷と病死す良物も是と云く事有依  
鳴物と云く人多くつ集め山に入て後方部と云



つりやうお殺すり産玉の書りもつり志麻郡野小  
橋井越の郡境村よりきて牛馬と害せり中元年  
狩りてお殺すり詳々志麻郡野小村のあつた記より  
豺狼 野猪 鹿 水獺

河魚類

腹赤魚 鱒ありむり太宰府より 朝廷より貢せり  
とつり上産川より味り五月をとり又後の書り  
云々も鱒のあつたり三月の辰月のおく河川又  
那珂川五箇山れ川をとりも是と約り是又味り  
長さ六七寸或は八九寸あり

鱒 那珂川 早良川 粕屋川 秋月川 上産川 下産川

三奈宜川 鱒の郡若宮川 吉川河 大畑川 赤  
郡大隈川 穂波郡飯塚川 怡土郡井原川 三坂  
川 中津郡平等川 吉井川 中津川 中津川 中津川  
小川と鱒もつり多し 中津川上産川の産肥大にして  
味り多し 秋月川の鱒も腹酸上産川と味り多し凡  
鱒と取らば投網は鱒をとりてとらふ又小川にてハ筍と  
とらふとら上産川産川産川ととらふとら毎々赤粉紙  
をひとら凡れ魚をハ海と川との境より川よりとらむり  
秋の末にハ流してとらふりては川ハ産と捕へて  
とら谷川にてハ筍と用てとらふ秋の末に鱒鱒とと  
とらととらとらハ海へとらふて潮と水とハ境はとらと







養として味美し山川と多し

鱧絲魚 川と多し其赤二種あり鱧と似て其味は

口のそとに針多人と云す又しらうと云

鰻魚 那珂川の産す其長さ寸と寸とあり其味は

二三月川下より多くしらうと上るされども白魚の多き

より比ぶると近江の御飯所の鰻魚よりも多し古へ

水魚と云し是れ里人多く食ふべし味は

麩條魚 早良川那珂川箱屋川を流して其味は川へ

のりりと細くして多し其味は梅の匂と用てとらる長

すうがし長し色白し其味は白魚と云ふ多し其味は

鱧殘魚 中といふと多し 忠之公の厨上方より其子と

多く取寄せし那珂川早良川其屋川の放つ今石多

麩條魚と似て人あり味は其味は是れ大坂江戸産多し賣

る其の白魚と同一他邦は其味多し其味は串と云

てして目と云を方と取く

つど 箱屋川と云はるは川と似たりは別と云ふといふ

武野川上野園と云はるは川と味は川と味は川と味は

鰻魚 秋月野川及西野馬足川と云はるは川と味は

鰻魚 志野川早良川早良川と云はるは川と味は

海魚類

紅紫魚 漢人三月四月のり鱧と川多く是れ川中

にも志摩郡唐泊岐志新所野川西浦那珂郡志賀郡



尾形多新宮相崎 京像部は尾形遠賀郡山麻柏  
京の漢人の物と用たり 其味を増すと云はば  
てを唐坊鯛と云味を少し 几鯛アヒと云はば  
一二里沖より川寄せある魚 其味を芳して味薄いと云  
二月と多く取ると鯛鯛と云四月と 團中と云はば  
多くると漢人麦菜鯛と云 團中と云はば 筑  
後肥前豊後水戸國と云はば 又海鯉鰹魚烏  
鰹魚黄縹魚金縹魚赤魚等海鯉の類と  
鰹魚 團中の海をとりてとる亦多し 海人物と云はば 或は細  
くして細くして煮てとる亦多し 青箭サヨシと云  
鰹魚 京像部 奥嶋大嶋志之部 大嶋嶋と云はば 冬月  
是と物と云はば 其味を芳し 京中と云はば 塩門と云

尾形多新宮相崎 京像部は尾形遠賀郡山麻柏  
京の漢人の物と用たり 其味を増すと云はば  
てを唐坊鯛と云味を少し 几鯛アヒと云はば  
一二里沖より川寄せある魚 其味を芳して味薄いと云  
二月と多く取ると鯛鯛と云四月と 團中と云はば  
多くると漢人麦菜鯛と云 團中と云はば 筑  
後肥前豊後水戸國と云はば 又海鯉鰹魚烏  
鰹魚黄縹魚金縹魚赤魚等海鯉の類と  
鰹魚 團中の海をとりてとる亦多し 海人物と云はば 或は細  
くして細くして煮てとる亦多し 青箭サヨシと云  
鰹魚 京像部 奥嶋大嶋志之部 大嶋嶋と云はば 冬月  
是と物と云はば 其味を芳し 京中と云はば 塩門と云







蝦蛄 鱈と似て尻平ふき多く作地と空居の煮  
て食すそ又石楠菜のしちり一和云やくけけとよ  
阿良 其味よし

海鷄魚 乃多るよのち其極りて乃多るハ七八人  
是と云へり今極りよハ稀にけ魚ハ尾と毒あり人殺  
せハ腫て死す樟樹或は楠となきあすべては甚  
妙は是医書に云記云く漁人知くまんハあえかハ  
この魚 ほんに似てちりり

海馬 海中の少魚とすうりて市と賣るもやありて  
行く並て婦人着する時是とも裏に把てハ子と産し  
安きよし 在りてんへりり志やくあきと別ハハ海馬

志つら 其味かハハむも亦之物とも多くはる所後氏  
是と食ハハ地の方多し猫面と云

鱧 其色黄褐なり味かハハ三月の迄はる後氏  
の後く此魚多々色ハ氏鮓鱧すといふ  
烏賊魚 いらの類多し 柔魚 瑣管 痛い水いふ  
とあり

章魚 此れ類亦多し くらとこ 鱧魚とあり  
あたまこ 海とあり其形うまうと似たり 河うまうと  
味おとせり大なるハ三四尺あり

海鱈 國中海濱は月の名多くしちりむ小なる所賣  
て食すやぐりくとも味良しかり長くて田代とよ



農夫の田と植る付是と用て英饒と云ふ所の田也と云  
漸長して予は是と云ふ一こ云と云て予は入るこ  
く行く大坂と云て行くは是と名付ては行くと云多く  
る所は侯家大と云ふ幾内の農夫是と云て買つて田  
圃のこやいとす糞油粕等を種まきと云と云わき  
棉荒と云つて用て大と利と得ると云い矣秋をまき  
衛也一そ長き事ある事と及ふ曉林を初まれば  
時を清く淹して俵に包て是方へ運ひ行く味も  
多氏子曉の食事もゆる民用と助る事多廣し凡今  
より十五年前よりいゝ程多くして西中侯人毎年十  
くと賣つて得る所の利益多かりし十餘年以來漸く矣

かや一は乃く漢人十編と云賣つて多賣窮すと云  
ぬうは形多し一と云記す○のふこもぬうの形あり  
そ腸と腸あり燈油とす丹波同情も多し一つのじ  
と云○と云と云のふと云と云○はくわたりは是又  
ぬうは形とぬうのふと云と云と云わたりと云と  
かゝく賣つてはめ成るし去り捨身として破味もて  
食す○あうせは又ふうの形こそわたりと云と云て  
こゝかし形大にしてかゝるもそ大なるものこそなり  
れ又所多りして是と云てわたりと云わたりは其形見  
よくしは矣極めて性強くしてかゝしはははと云き竹  
木と云けは是を教日勅撰す切て後其肉活て勅く



調食する法ぬきよしこ方として食すに味もよく  
背魚 此目魚の別種と鯉底臭る味あり  
目張 赤黒二種あり又行とやうとよき  
めろろより口狭くしてしるよし味目張と不皮  
鯢 二種あり一程はあいらくと云骨毒し毒ると云  
いとき 其形めろろに似て首小なり長そ人より淡  
馬一敗と安し厚なりと云す

貝類

蛇 國中崎々海濱或は山出崎の海中に多くして海  
中石山當りき甚後と産凡れ國中潛女の住所也  
る種所大島 彼は浦にけし所の海をハガ女人のつこ

とあり 鰻ととも質斗蛇ときり常螺海夫人とともて  
中業とくは内種所入潛女を主事持ととも世人  
種所の石变的味揚とともとも是と味ひ試れと  
実多事そし但鰻ととも物入ととも治産ハ味  
ありととも

質斗鰻 蟹人鰻とともて横一切てテす是と切のし  
と云又極と似るる所種の一とも持す鰻と切也長  
くしてテるる其の一と云蟹人等必中とて製するのこ  
水す長門石見徳政を政對するなりとて鰻と云り  
是と製して石垣とて賣る種所にて製する海の一と  
毎年七月 江戸と被せり  
凡れ系江戸と被せり海の一と  
高木の海人製する所と云



野北大蛤 志摩郡野田浦より取り出づるのものを年  
の長き字尋ありきと狭く是と用て船のりたりと  
るるをいふるに蛤を殻のつら白く厚く其味を煮こ  
蛤の海中とあり八目と上よして例たりとるるをいふ  
芥く切と切るるに形あり是といふなりと云海人  
を云と云て実より海干ても海干り字尋汁り海を  
ありとも又を野田初浦より取り出づるに地産と不及  
して且小いし唯國人野田蛤と稱すは蛤他邦より  
之といふ但長引筋の厚く産するもの多し細より  
老海參 志摩郡石崎より多く是と云る其形丸く  
上より甲ありと云るに其肉色赤く國者よりと

毎年編月 江戸之秋の味ありはと之も珍味に  
は名未詳なり性の好むも多しと云  
馬刀 鴨の貝とも云河津の海中と出する多し其  
味も二三寸もやきて食す又鴨の貝とも云馬刀よく  
香沖しおし少欠の白壳殻に付て産す又近江産  
するもの大く蚌の鴨の貝とも云又鴨の貝とも云  
榮螺 由中海をいふる多し  
寄居貴 又寄りとも云干ふの味よく香と鴨のつこ  
くもの味よく蟹の味よく作地とも云酢にして食す  
蛸 河海の名沙中とあり  
蛸 魁蛤と云る



たいたき 掃多う 今海強治の産す 是非も掃く  
あり

うつ貝 志摩郡初浦の海中 四母を飼う あり 味淡

蟹 海産物 甲の子と云ふ 四方人余あり 是を  
振りて 雄と負て 海に入

いよの他方と掃く 是物と殻を 舟に水と汲み 尾は  
焼心は杖と肉を 食ふ

うつせ貝 養生浦のうつせ貝 古きも あり 物と  
是貝殻として 貝の皮と云ふ あり

淡菜 い貝と云ふ くりと 削る 北之志 聖徳強治云

虫崎の多し 是非海と云ふ 海士人 是と云ふ 事地  
とろく あり 其味 又ほして 用ゆ

海産物 其肉と喰す 其味 甲香と云ふ 合巻と用ゆ

蛸 海産物 其味 甲香と云ふ 合巻と用ゆ

辛螺 大なり あり 味 辛と云ふ あり 味 辛と云ふ あり

甲貝 螺と云ふ あり 味 辛と云ふ あり 味 辛と云ふ あり

甲貝 螺と云ふ あり 味 辛と云ふ あり 味 辛と云ふ あり



光螺 ちりく海をこゝあり

海膽 ちりくの崎と生れ二月よりわろく是とちり共  
壳とちり肉とちり塩と加へて醃とす其味甜ちり  
志摩郡姫崎とちり製するそのハちり京とちり豊崎の産  
是とちりくち他の崎もちりあるとちりくちちり西の産とちり及  
凡魚醃醃の類を味是とちり及ちりそのちり高佳貴  
とちり但ちり多の後に後塩して味愛ん  
海菜 海中とちり多くして食ふとちりくちりくちり  
城 海菜とちりつきて生れ少ある女島ちりぬとちり  
飯のちりつけるとちりし醃とちりてす  
ちり海菜はちりつきて拾も枝のちり枝とちりくちりし

考くはとちり肉とちりて食す

河川 河川の山川とちり是とちりくちり九月の水とちり  
ちり陰氣とちり感すちりくちりい河川とちりくちり  
ちり和申とちり多くちり菊中とちり入ちりて推奴とちり  
残氏とちり是とちり米糍とちりくちり合考て食す  
石ころ貝 石巻中とちりくちりてちり地ちり掃と  
ちり

蟲類

蛸場 岩穴の内とちり多くちり物中 石巻郡矢野村の  
ちり穴のちりくちり甚多ちりちりちりちり出て蚊と食す  
螢 ちりくちりちり物中 宰府に思の川の螢ちり古舟



よきとあり其れくろくちあり蓋峰川杉月の婦まる川  
物屋川口初香雅川猪野川宇美川をく非はく  
多し五月初香く初来して多く飛ぶ初来く  
後をわし

金亀子 甲虫 茅蜩 皆山中くあり

山蝦蟆 常れつくと形も多し多し初香部  
山田河内のと井野の山中くあり是井よの蛙と同一  
其聲ありく多し多し

飛前國續風土記卷之二十七終



